

地域とともにある学校づくり ～人間関係力・主体性・表現力の育成を通して～

岐阜県可児郡御嵩町立上之郷中学校 校長 加藤喜代司

1 主題設定の理由

本校は、岐阜県中南部の木曾川南岸に位置し、全校生徒42名の小規模校である。各学年15名前後だが、この人数でも、自分の本当の気持ちが伝わらないことがしばしばあり、そのたびに、人の意思や思いは、そう簡単には伝わらないものであると実感することすらある。だから、よりよい人間関係を構築する人間関係力や、自分から主体的に求めていく主体性、言葉でちゃんと話し切れる表現力を高め、もっと大きな集団の中でも、委縮してしまうことなく自分のよさが発揮できるようにしていきたいという願いがあった。

また本校は、60年以上の歴史のある茶園活動に特色をもつ学校でもある。しかし近年、この茶園活動は、毎年同じ方に来ていただき、ごく簡単なことを一緒に体験させていただく程度の体験活動しか行われておらず、もっと主体的に地域に働きかけていく学習活動をし、ふるさと上之郷をさらに愛することのできる生徒にしていきたいという願いもあった。

この2つの願いを具現化するために必要な資質・能力を人間関係力・主体性・表現力の3つと明確にした。(以降この3つを“3つの資質・能力”と表記する)そして、その育成に向けて授業を3つの資質・能力でつなぎ、地域人材とつなぎ、PDCA サイクルで常に見つめ直すカリキュラム・マネジメントを通して普段の授業づくりと地域連携2つの角度から取り組むことにした。

こうすることで、各教科の授業で3つの資質・能力を高めるのと同時に、総合的な学習の時間において地域教材を使い、地域に働きかけるための探求的な学びを構築し、これらの学びを通して、自己の成長を自覚できるようにしていけば、3つの資質・能力がさらに高められ、大勢の中でも自信を持って自分のよさが発揮できる生徒になるだろう。そして、そのとき地域の方と深くふれあうことで、地域をもっと愛する生徒に育てられるはずだと考えたからである。

以上の点を踏まえ研究主題を「地域とともにある学校づくり」～人間関係力・主体性・表現力の育成を通して～と設定し、普段の授業、地域との連携の2つの側面から実践を行った。

2 実践の概要

(1) 普段の授業における実践 ～3つの資質・能力による教科等横断的な学びの構築～

①【この実践におけるカリキュラム・デザイン】 3つの資質・能力の定義

全校職員が同一ベクトルから指導にあたるよう、授業において3つの資質・能力がそれぞれ高められた状態を下記のように具体的な姿として定義した。

人間関係力:	互いに自分の思いを受け止め合えるリスペクト関係が築けている状態 不完全なものを少しずつ修正し、補い合い、よりよいものへと変えていける状態
主体性:	その時間に何を追究するのかがわかり、解決のための見通しをもち、粘り強く取り組んでいる状態 学びを振り返り、次に何をすべきかをつかんでいる状態
表現力:	単に言葉で伝えるだけではなく、思いや考えを伝え合い、そこで気づいたことを通して考えを広げたり、深めたりするなど、表現することによってもたらされた変化が自覚できている状態

また、これらを包括し、1単位時間において全教科共通して意識すべきポイントを具体的にまとめ(資料①参照)、全職員と全校生徒に共通理解を図った。

②【この実践における成果①】 学校評価からも読み取れる職員の意識の変化

6月初旬と7月中旬に、全職員を対象として実施した意識調査の結果を比べ、数値の伸びが

大きかった項目は、自分の思いを表出する指導(18.75%)、相手へのリスペクト感覚を高める指導(18.70%)等、すべて普段の授業における3つの資質・能力にかかわる項目ばかりであった。

ここから、本校職員の授業におけるカリキュラム・マネジメントに対する意識が徐々に高まり、実際に自分の授業を通して成果出ている、すなわち、生徒が変容しつつあると多くの職員が感じていることが読み取れる。

③【PDCA サイクルによる微調整】 自己の変化を自覚する時間の位置付け

実践をしていく中で、学びの振り返りと変化の自覚に弱さがあることが見えてきた。そこで、新学習指導要領における資質・能力を支える3つの柱をもとに作成した振り返りの観点を下記のように示し、自己評価をする時間を授業の終末に位置付けるようにした。

知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ➤ この時間に新たにわかったことは何か？ ➤ 問題解決にあたり、活用した知識・技能や既習事項は何か？
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 誰とどんな方法で解決したか？ ➤ 誰のどんな発言や姿によって変化したか？
学びに向かう力	<ul style="list-style-type: none"> ➤ この時間に学んだことは、日常生活の中のどことつながるのか？ ➤ さらに追究してみたいことや自分が(家で)しなければならないことは何か？

授業の終末において生徒が自己評価をする観点

④【この実践における成果②】 主体的な学びが構築されると同時に職員にも変化が

「今日僕は、…について追究したいと思います。」

授業が始まる時、このような言葉を話す生徒が増えてきた。これは、以前は今日の授業で学びたいことを質問しても答えられない生徒がほとんどだったが、授業の終末における振り返りの時間を大切にした結果、自己の成長を自覚し、次に自分がすべきことが理解できるようになり、自分なりに目標をもって授業に臨む主体的な学びができる生徒が増えてきたことを意味している。

一方職員は、授業における3つの資質・能力について共通理解のもと、同じ角度から指導を行っているため、生徒を褒めるポイントが一致するようになった。それぞれの職員が、別々の部分を褒めていても、あまり大きな効果は得られないものだが、3つの資質・能力と教科をつなぐカリキュラム・マネジメントにより、生徒の3つの資質・能力の変容を職員も自覚できるようになり、それが、職員の自己有用感や働きがいにもつながっていくこととなった。

(2) 地域連携における実践 ～地域人材をつなぐことによる探求的な学びの構築～

①【この実践におけるカリキュラム・デザイン】 茶園活動を通して3つの資質・能力を高める

昭和30年に始まり、親子3代にわたり60年以上も脈々と受け継がれている本校の茶園活動。今の生徒たちにとっては、地域の方と行うイベント的な活動。この活動におけるカリキュラムをマネジメントし、茶園活動を通して地域人材をつなぐことで、3つの資質・能力をさらに高めていきたいと考え、次のようなデザインを描いた。

- ・ 生徒が学習対象と深く関わり、茶園活動における問題を発見し、その解決を行う探求的な学習活動を総合的な学習の時間を中核に据えて取り組む
- ・ 外部講師として学校に来ていただくだけでなく、生徒が地域に働きかけていく活動も位置づけることで、地域と学校が双方向的で有機的なつながりを深め、ふるさと上之郷を愛する気持ちをさらに高めていく

そのために、第1段階では、大切な茶葉をあまり丁寧には扱っていなかったことに気づく学習活動を、第2段階では、新たにペットボトルとして商品化したいという願いを実現させる学習活動を通して、3つの資質・能力に迫ることとした。

②【実践①】茶葉をあまり丁寧には扱っていなかったことに気づく学習活動（第1段階）

生徒は、ただ指示通り動いていただけで、自分たちの作業ぶりがあまり丁寧でなかったことには気づいていない。だから、一方的に指導を行うのではなく、生徒の探究心や知的好奇心を刺激するよう、保護者、地域とそれぞれの役割を決め、茶園管理者や保護者の思いから学ぶ、手もみ茶保存会の方から学ぶ、飲み比べる(テイスティング)の3つの角度から学習活動を行うこととした。これらの学習活動の終わりに生徒たちは次のような感想をもった。

私は今日テイスティングで舂五山茶の1回目と2回目と白川茶の3つを飲み比べてみて、全然味がちがってびっくりしました。2年生の報告や校長先生の話聞いて、心を込めていねいにやることによって味や見た目が変わったので、これからの茶園活動では茶摘みからいねいに心を込めてやりたいです。また、同じ工程でもかなりのちがいがあったので、今日振り返ったことを生かして、これからの茶園活動へとつなげていきたいです。そしてペットボトル化や舂五山茶を紅茶などにアレンジして道の駅などで販売できたらいいなと思いました。



写真左側は最初につくった茶葉。右は手もみ茶保存会の方がつくった茶葉。左はテイスティング時の生徒の感想。

③【実践②】新たにペットボトルとして商品化させる学習活動（第2段階）

第1段階で多くの生徒が抱いた思いを受け、ペットボトルとしての商品開発を行うことにした。私たちは、ここでも第1段階と同様に保護者、地域の方と連絡を密に取りながら、それぞれの役割を決め、保護者を含め外部の皆様が学校に遠慮することなく動けるように配慮した。

学校では、生徒たちにペットボトル製造業者最低ロットにあたる24,000本(1,000箱)のペットボトルを販売する方法を考えてほしいと課題を出した。彼らは、この大きな課題を解決するために必要となってくる小さな課題を「そのためには、何をしなければならないのか」と考える逆算的な発想によって見つけ出し、その解決を行う探求的な学習活動に取り組んだ。

そして、その解決の過程において、地域住民や全校生徒を対象として行った意識調査を根拠に自分の考えを形成し、仲間との対話を通して集団としての考えにまとめたり、その考えや思いをもとにパッケージデザインやキャッチコピーといった成果物を、プロのデザイナーやクリエイターと相談をしながら創造したりするなど、総合的な学習の時間を核として、今まで彼らが学んできたすべての知識・技能を総動員させながら、学習を深めていった。そして、最後にはそれらをもとにプレゼンテーションをつくり出し、店や公共施設に販売に協力していただけるよう説得に出かけていく学習活動を行った。

④【この実践における成果】客観調査からもわかる生徒の変化

本校では、学級の親和度を測定する客観調査を年間2回実施している。この活動を主として実施した学年における5月と11月の調査結果の概要は下記の通りである。

【5月調査結果の概要】

- ・人間関係の形成がやや弱く、どこか活気がない状況が見られる「かたさのある集団」である
- ・みんなで協働し、楽しさを分かち合うような場面が少ない

【11月調査結果の概要】

- ・「親和的なまとまりのある学級集団」で、生徒同士の人間関係も良好である
- ・生徒たちの主体性のある活動を見守るような委任的な面の比重を高めた対応が効果的
- ・生徒たちは、情緒が安定した中で、主体的に活動できていると感じている

本校は、学級解体がないため、集団を構成している人間関係は、学年が変わってもあまり変化することはない。したがって、この調査の半年前にあたる前年度11月の結果は、5月に記載されている内容とほぼ同じであった。しかし、この学習活動により生徒自身も自分たちの変化が自覚できるくらい成長が認められるに至っている。ここから、これらの学習活動によって、生徒の姿に変化がもたらされたと考えることができ、この実践の有効性が証明されたととらえることができる。

3 成果

(1) 自分の考えを言葉で伝える力に大きな伸びが認められる

生徒自身は自分の成長を感じている言葉に説得力を感じた。根拠のない自信ではなく9年間の自分の経験を根拠に語る姿。具体的場面を根拠に語る姿。上ばかりでは本物の力を感じた。

授業を参観された方からいただいた感想

本校公表会で、授業を参観された方から左のような感想をいただいた。(資料②参照)

この感想に示されている通り、挙手発言の回数が著しく増え、授業だけではなく全校が集まった場においても発言をする生徒が途切れないほど、どんどん自分の意見が言えるようになってきた。

同時に、1質問に対して1解答が中心だったのが、発言に対して自分はどう思うのか、または、発言を聴いて自分はどう変化したのかを話せるようになっていたり、新聞・テレビ・ラジオの取材等でも相手からの質問に対して、さっと自分の思いを答えることができるようになっていたりするなど、様々な角度から徹底して3つの資質・能力を高めることで、一人一人の生徒が、どんな環境の中に置かれても、自分のよさを発揮できる力を徐々に身につけてきた。

(2) 地域全体に、ふるさと上之郷を愛する気持ちの高まりが感じられる

お茶の生産・商品開発・販売を通して、地域との双方向的・有機的なつながりが生まれ、生徒たちのお茶に対する愛着や、ふるさとを愛する気持ちが高まり、それに伴い、保護者や地域の皆様もお茶や故郷に対する思いが高まってきていることが感じられる。換言すると、生徒が地域に働きかけることで、地域の人々の心を動かしたと考えることができる。

下記に、新たに販売することになったペットボトル茶(写真右)を、保護者の方が初めて手にされたときの感想を紹介する。ここからも、この学習活動により保護者(地域住民)の地域愛の高まりが読み取れる。



完成した触五山茶ペットボトル

ペットボトルを見たとき、思わず叫んでしまいました。そこに我が子が写っているのですから。こんなものを捜してもありません。本当に嬉しかったです。

中学校に通うようになって、お互いに忙しく、学校での様子をあまり聞いていなかったのも、友達と仲良くやっているかなあ。嫌な思いをしていないかなあ。そんな心配ばかりしていたけど、このペットボトルは心配を吹き飛ばしてくれました。この子だって、この子なりに一生懸命に頑張っているんだなあ。そう思うと、本当に嬉しくて、何だか胸が熱くなってきました。

このペットボトルは私の大切な宝物。永久保存します。ふるさとってあったかいですね。

保護者の方が初めてペットボトルを手にされたときの感想

(3) 職員の一体感と有用感の高まりを感じる

これまで共通理解をしながら活動を行ってはいったものの、そのとらえ方については、一人一人微妙に違いがあった。しかし、目指す方向を、3つの資質・能力の向上と焦点を絞り、これらの力が高まった状態を定義したことで、具体的に目指す姿がイメージできるようになった。そのため、全員が同一ベクトルからの指導をすることになり、効率的に生徒の力を伸ばせるとともに、職員の一体感と有用感を高めることにつながった。これが、学校全体を大きく変化させる原動力となった。